

## 三郷俳句塾(二月会・第十一期第十一回目講座)

【日時】令和元年二月十五日(土)

【場所】瑞沼市民センター

【参加者】稲田眸子、荒木輝二、池田美智子、石崎洋子、磯野ヨシ

上田雅子、桑原和久、高橋敏恵、中井川恭子

中田麻沙子、能川はるを、橋本喜代志、早川恵美

平林益雄、松田明子、宮川洋子、村田文雄、山本万象

【欠席投句】太田 孝、小野紗耶子、牧野政良、御沓加壽

【兼題】荒

【投句・選句】四句投句、五句選

◇秀句ギャラリー選評

稲田眸子

声荒げ一步も引かぬちやんちやんこ

磯野ヨシ

昔から癩癩持ちの親父はよく目にしていた。ああはなりたくないなど内心思いながら傍観してきたが、その年になると親父の気持ちもわかるような気がする。最近逆ギレする年寄が多くなつたと新聞が報じていた。会社に長年勤めていた人が定年を迎え、新しい会社について行けずキレてしまうというものだ。特に、会社に勤めていた時に地位的に高い役職にいた人ほど、部下がやってくれていた、もっと気を使えるひとが沢山いたなど元の会社と比べてしまい、承認欲求が満たされず、ついキレてしまうという事らしい。

掲句の場合は、逆ギレということではない。ちやんちやんこを着たおじいちゃんが、声を荒げながら自分の考えを主張して情景を想像する。「ちやんちやんこ」が絶妙な効果をあげているのである。年は可愛くとりたいたいものである。

色も香も妻の気配り柚子湯の夜

桑原和久

独特の清々しい芳香、さっぱりとしたほどよい酸味。香り高い

今や、柚子は私達の生活に欠かせない存在。冬が旬の柚子は香りも強く、強い香りのもとには邪気がおこらないという考えもあり、冬至には柚子湯を沸かすのが習いとなっている。

「今日は、冬至よね。柚子をふんだんに使った料理、柚子湯、その柚子のフルコースにするわね」と妻の提案。その提案に顔がほころぶ作者。この句からそんな夫婦の会話を思い浮かべた。「色」も「香」が柚子で彩られる家族の団欒を想像させてくれたのである。末永く、奥様を大切に。それが鴛鴦夫婦の秘訣であろう。

初土筆愛でれば誰かに伝えたく

中井川恭子

見た目も可愛い土筆。春の訪れを告げてくれる土筆。枯れ色の土手に、土筆を見つけた時のときめき、思わず「あつ」と声をあげてしまう。何気ない暮らしの中で、ふとみつけた小さな幸せ、あの感じに似ている。その小さなときめきを誰かに伝えたくつたという作者。大人になっても少女の心を持ち続けておられる作者が紡いだ十七文字の詩が掲句である。「初土筆」の「初」がういういしく、好ましい。

志立て東京へ春の駅

荒木輝二

高度経済成長を迎え先進工業国に飛躍した日本。東京には大企業の本社が集まり、仕事量も日本一。若者は、ふるさとを捨て、東京を目指した。若者はそれぞれ自分なりの志を立て、東京駅に降り立ったのである。が、多くの若者は志半ばで挫折を味わう。作者もその一人であったのかも知れない。この句からは、決して無駄なチャレンジではなかった、そう呟く作者の声が聞こえてくる。「春の駅」の「春」がそのことを告げている。

荒れた手を労り撫でて春を待つ  
 草餅を伸ばし頬ばる子供たち  
 朗報にスキップしたき帰り花  
 タンカーの船足重し春の海  
 春一番我が青春の片想ひ  
 荒川にポンポン蒸気水温む  
 冴え返る上野の森に占師  
 白鳥の六羽の飛翔昼の月  
 バス停の行列離れ日向ぼこ  
 荒星や十字を背負ふイエス像  
 夫の息深く正しく寒明くる  
 ダツフルコート夫にビートルズの時代  
 水漬をしきりに啜りランドセル  
 風のまだ硬きに荒れし恋猫よ  
 バレンタインデーひとつ残りしチョコレート  
 沈丁花恩師の語る被爆談  
 胸の奥ちくりとバレンタインの日  
 音沙汰のなき友の声冬菫  
 畦焼に跡継ぐ人も加はりて  
 網繕ふ啜え煙草に冬の虹  
 床板に素足吸ひ付く寒稽古  
 保育士の背に隠るる児鬼やらひ  
 春隣下校の列のふくらみぬ  
 ドリップの弾むリズムや春隣  
 寝返りは栗の丸太のごと廻れ  
 代掻きの荒田一画残りある  
 ひらかなを読み初めし児や下萌ゆる  
 日脚伸ぶお迎へまでの鬼ごっこ  
 定食に菜の花浸しからし和え

池田美智子  
 池田美智子  
 磯野ヨシ  
 上田雅子  
 太田 孝  
 太田 孝  
 太田 孝  
 小野紗耶子  
 桑原和久  
 高橋敏恵  
 中田麻沙子  
 中田麻沙子  
 能川はるを  
 能川はるを  
 橋本喜代志  
 橋本喜代志  
 早川恵美  
 早川恵美  
 早川恵美  
 平林益雄  
 牧野政良  
 牧野政良  
 牧野政良  
 牧野政良  
 牧野政良  
 松田明子  
 松田明子  
 御香一敏  
 宮川洋子  
 宮川洋子  
 宮川洋子  
 宮川洋子  
 村田文雄

「荒ぶる」を謳ふ若人息白し  
 改札の缺なつかし春闘果つ  
 乳呑み子や朝寝の母の腕の中  
 ゴム風船大きさ競ふ裏通り  
 ◇投句◇  
 ふらここやいまだ子離れできぬ妻  
 大試験終えて大きく息を吐く  
 母さんに甘えしあの日葛湯吹く  
 尼寺の荒れ果てしまま春の泥  
 荒ぶれば荒ぶるほどに春遠く  
 志立て東京へ春の駅  
 冬の空バンクシーの如変わりゆく  
 鴨の群れ椋鳥一羽草を食む  
 荒れた手を労り撫でて春を待つ  
 緊張解ぐ心優しき春よ来ひ  
 昨日今日三寒四温日々過ぐす  
 草餅を伸ばし頬ばる子供たち  
 荒れくるう暴風踊る寒明よ  
 カジノ桜荒れる国会春めく世  
 空港せうこうコロナウイルス荒れにじわ二月  
 荒れ野はらタンポポ目を出し春よ来い  
 朗報にスキップしたき帰り花  
 影淡く蔭濃く冬のさくらかな  
 起きてすぐ外見る習冬木の芽  
 声荒げ一步も引かぬちやんちやんこ  
 春の雨春を濡らしてゆきにけり  
 薄氷ゆるびて恋の始まりぬ  
 タンカーの船足重し春の海  
 浅蜷とり空になりゆく干潟かな  
 山本万象  
 山本万象  
 山本万象  
 山本万象  
 稲田眸子  
 稲田眸子  
 稲田眸子  
 稲田眸子  
 稲田眸子  
 荒木輝二  
 荒木輝二  
 荒木輝二  
 荒木輝二  
 荒木輝二  
 池田美智子  
 池田美智子  
 池田美智子  
 池田美智子  
 池田美智子  
 石崎洋子  
 石崎洋子  
 石崎洋子  
 石崎洋子  
 石崎洋子  
 磯野ヨシ  
 磯野ヨシ  
 磯野ヨシ  
 磯野ヨシ  
 磯野ヨシ  
 上田雅子  
 上田雅子  
 上田雅子  
 上田雅子  
 上田雅子





定食に菜の花浸しからし和え  
 「荒ぶる」を謳ふ若人息白し  
 改札の缺なつかし春鬪果つ  
 乳呑み子や朝寝の母の腕の中  
 ゴム風船大きき競ふ裏通り

次回兼題

【原】  
 「編集・村田文雄・稲田眸子」

村田文雄  
 山本万象  
 山本万象  
 山本万象  
 山本万象